

論文要旨

本論文では、ヴィクトリア朝中期から後期にかけて、生き方の転換を迫られた若い女性たちの姿を、当時の文献の中から読み解き検証する。ここで素材とする文献は、シャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』と、L. T. ミードの小説『少女たちの世界』、並びに彼女が編集した雑誌『アタランタ』である。

2人の作家には、作品を通じて強い関係性が存在する。この関係性を詳細に分析し、考察対象とする。それによって、2人の文学的な関連性を明らかにするものである。また、雑誌『アタランタ』の希求する読者像の中に、ジェインの目指した理想がどのように影響しているかについて論じる。

本論文では、まず第1部では「『ジェイン・エア』に見られるヴィクトリア朝イギリス社会」というタイトルの下に、ヴィクトリア朝中期に光を当て、ジェインが求め続けた女性としての生き方を究明する。

第1章「イギリス社会と『ジェイン・エア』」では、この作品の周りを取り巻く社会状況を考察の対象とする。人々がこの小説に共感し、反響を巻き起こしたという事実に着目し、主人公の言動に込めた作者の思いを明らかにする。

第2章「ヴィクトリア時代の女性たち」では、イギリスに存在する階級制度に光を当てる。

第3章「中流階級の女性の結婚」では、この階級の人々の結婚観について考察し、女性の生き方という観点から検証を加える。

第4章「作品に見られるキリスト教」では、作品の中に様々な形で現れるキリスト教を、作者の宗教に対する考え方に基づいて解明する。また、作者の往復書簡などを手掛かりに、ブロンテの死生観を明確にする。

第5章「精神疾患と神秘性」では、登場人物の一人が患っていた精神疾患に対する当時の考え方を究明する。さらに、作中に独特の雰囲気醸し出している神秘性について考察を加える。

第6章「大英帝国と植民地」では、小説内の描写や登場人物の発言から、当時の社会における植民地と宗主国の関係を取り上げ、おもに男性の生き方という観点から作品を考察する。

第7章「誇り高き大英帝国」では、当時のイギリスの女性や文化と、他国の女性や文化とを比較する。これらの描写から、他国の女性に対する当時のイギリスの人々の意識を作中から読み解く。

次に、第2部では『ジェイン・エア』の娘たち」というタイトルの下に、ヴィクトリア朝後期のイギリスの女性たちに焦点を当てる。ミードの作品や『アタランタ』を手掛かりとして、ジェインが求め続けた理想が、彼女の娘世代とも言える女性たちの心の中でどう変化せざるを得なかったのか、あるいは変化しなかったのかを指摘する。

第1章「『少女たちの世界』に見られる『ジェイン・エア』の影響」では、両作品に色濃く反映するキリスト教の影響について比較する。

第2章「作品内の人々」では、ミードが『ジェイン・エア』をメタ・テキストとして『少女たちの世界』の中で登場させ、読者に紹介しているという事実に着目する。2つの作品の主要登場人物の比較と共に、『ジェイン・エア』を自著に載せた理由を探る。これらの考察を通じて本研究者は、ミードは自分の小説内の禁止事項とは裏腹に、実際には、時代を切り開いて生きていく女性の模範として読者に積極的に『ジェイン・エア』を奨励したい気持ちがあった、というテーゼを提出したい。

第3章「作品におけるジプシー像」では、『少女たちの世界』におけるミードの創作方針を明らかにする。この新しいタイプの主人公は、変化しつつある社会状況をたくましく勇敢に乗り切っていく「ジェイン・エアの娘」ともいうべき、当時の女性の「あらまほしき姿」であることを本章の結論とする。

第4章「ヴィクトリア時代と『アタランタ』」では、ミードが編集者として従事した若い女性向けの雑誌『アタランタ』を取り上げる。本章では2008年から2010年にかけて復刻版として出版された1887年創刊時からミードが編集者を辞するまで6年分の雑誌『アタランタ』について検証を加え、どのような雑誌であったのかを明らかにする。

第5章「モリフクロウ」と「アタランタ手紙靴」では、特色のあるこれら2つの記事を取り上げる。これらの企画に込められた編集者の意図を究明する。

第6章「『アタランタ』にみられる日本」では、日本人を物語の中心に据えた2作品を分析する。また、「モリフクロウ」に掲載された日本女性「タキ」の投書については、当時の新聞や資料を分析し、その姿を明確にする。

第7章「ジェイン・エアの娘たち」では、個人の抱える「孤独」が「社会」を変革する原動力になることを指摘する。「女余りの時代」を経て、新しい存在となり得た女性たちのエネルギーが、社会全体の転換に寄与したことを指摘する。

ジェイン・エアの理念を受け継いだ「娘たち」は、個人で生きることを選んだ。そして「個」として抱えていた悩みや苦しみを「集団」として共有し、団結して社会変革や女性の社会進出に道を開いた。これこそ「余った女」の持つ、未知なる将来を切り開くエネルギーの象徴である。

ジェインが目指した前向きに生きる独立した「個」を自覚した「娘たち」は、他人を理解し、協調して生きていこうとする懐の深さを手に入れ、「新しい存在」としての強いエネルギーを秘めた力となりえたことを本稿の結論とする。